



校長通信

No.22 令和3年3月1日

和歌山市立河北中学校 校長 戸川定昭

3月に入り、寒さもやわらぎ、うららかな春の日差しが心地よい季節となりました。3年生は、卒業式もいよいよ間近となりました。新型コロナウイルス感染症拡大防止に配慮しつつ、卒業生の歌の練習にも身が入って来ました。1・2年生は最後の学年末テストを無事終え、少しほっとしている今日この頃です。



《言葉のチカラ》

ほけんだより2月号にも掲載されていましたが、私たちが交わしている言葉は、お互いの行動や考え方に大きな影響を与えることがあります。そのことを、本当に実感させてくれる小学生の作文がありましたので、紹介します。NPO法人・日本語検定委員会主催（読売新聞社協賛）の日本語大賞（小学生の部）入選作品です。

「おとうさんにもらったやさしいそ」 佐藤亘紀（茨城県、1年）

僕の心に響いた言葉は、「おとうさんはちょっと遠いところで仕事をするようになったから、お母さんと元気に過ごしてね。」です。その時は僕は2歳でした。とても小さかったので直接言われたのは覚えていませんが、言ってくれた時の動画がおかあさんのスマホに今でも残っているので、好きな時に聞くことができます。

この普通に思える言葉が僕の心に響いた理由は、実はこれがお父さんがついた嘘だったからです。この言葉の一週間後に、お父さんは白血病で死んでしまいました。そして、この言葉をお父さんが残したのは病気がわかって入院した日でした。お父さんは、会えない間に僕が悲しまないように、わざと嘘をつきました。嘘は普通はよくないけど、これは、お父さんが僕のためについた優しい嘘だと思います。この言葉を動画で聞くと、お父さんに会ってみたくて少し悲しい気持ちになります。でも悲しいだけじゃなくて、悲しませないように嘘をついてくれたお父さんの優しさを思っ「がんばろう！」と思えます。お父さんが死んでしまったことは知っているけど、お父さんの嘘が本当になって、いつか夜遅くにドアの前で「ドアを開けて。帰って来たよ。」と言っているお父さんに会いたいです。こう思えるのも、お父さんの優しい嘘のおかげです。

僕からお父さんに伝えたいことがあります。「お父さん、嘘がばれてるよ！だってまわりに病院の道具がいっぱいあるし、お父さんが横になっているし、目から涙がちょっとだけ出ているし、声が寂しそうだから。」でも僕は、騙されているふりをし続けようと思います。

お父さんが優しい嘘をついてくれたおかげで、僕の心は強くなれています。これからもお父さんの言葉を守ってお母さんと元気に過ごしたいです。お父さん、優しいそをありがとう。（2月26日 読売新聞より。原文はほとんど、ひらがなですが、今号では漢字に変換しました。）

今は亡き、優しかったお父さんの言葉が、亘紀くんの心に深く残り、亘紀くんを勇気づけ、元気づけていることがよくわかる作文です。難病にかかり、スマホを通して、息子に話しかけるお父さんの心情は、いかばかりであったことでしょう。

小学1年生の作文ですが、言葉の大切さ、命の大切さを教えてもらったような気がします。また、私自身、家族に対して、また関わった生徒に対して、どれだけ勇気を、元気を与える言葉をおくることができたのか、自分自身の過去を振り返り、深く反省したしだいです。

《和歌山県学習到達度調査について》

昨年12月に実施された学習到達度調査の結果が先月発表されました。1年生は、国語、数学の2教科が調査対象で、本校の1年生は、県の平均正答率に少し届かない結果となりました。2年生は、国語、数学、理科の3教科の調査のうち、数学、理科で県の平均正答率を上回りました。特に、文章で解答する問題への無回答率が県の平均よりも大幅に低く、最後まで粘り強く解答しようとする意欲が見られました。本校の教育目標である「正しく判断し 粘り強く実践する・・・」の姿勢が生徒に浸透しつつあると感じています。

平均正答率のみに一喜一憂するのではなく、本校生徒の課題を見つけ、それを克服していく指導の工夫が大切となります。調査結果を更に分析し、指導に生かしていきたいと思ひます。